

永久保存 (10-5)

墓 山 古 墳

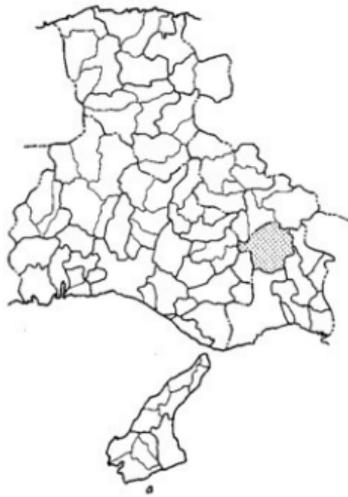
—国道176号線拡幅工事に伴う発掘調査—

1987. 3

兵庫県教育委員会

墓 山 古 墳

—国道176号線拡幅工事に伴う発掘調査—



1987. 3

兵庫県教育委員会

序 文

わたくしたちのふるさと兵庫県は古くから文化が開け、全国的にみても貴重な文化財が数多く残されています。

これらの文化財は、わたくしたちの祖先が残した文化遺産であり、ふるさとの歴史を知り、理解するためにかかせない国民の共通財産として保護、保存に務めるとともに、文化向上のため積極的に活用を図ることが必要と考えます。

最近、各種の開発行為等に関連した埋蔵文化財の発掘調査が増大しておりますが、このたび国道176号線拡幅工事に先立って、三田市所在の墓山古墳発掘調査を兵庫県北摂整備局の委託をうけ、兵庫県教育委員会が調査を実施いたしました。

このたび、発掘調査の結果をとりまとめ、この報告書を刊行いたしました。

最後になりましたが発掘調査に際して、なにかと御指導、御協力をいただいた多くの方々へ厚く御礼を申し上げます。

昭和62年3月

兵庫県教育長 井野辰男

例 言

1. 本報告書は兵庫県三田市横山町1545に所在する墓山古墳の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は国道176号線拡幅工事に伴い、北摂整備局の委託を受け、兵庫県教育委員会が実施した。また、遺跡発見後の測量調査は兵庫県教育委員会が実施し、三田市教育委員会の援助を受けた。
3. 使用した写真のうち、遺物については森 昭氏に撮影して頂き、また航空写真はアジア航測株式会社撮影のものを使用した。その他については調査員によるものである。
4. 使用した図のうち、遺構については調査員が実測し、遺物については高島知恵子・石本淳子が実測した。また製図は高島・石本が実施した。
5. 第1図周辺遺跡分布図は、国土地理院発行2.5万分の1「三田」を使用した。
6. 本書の執筆は調査員が行ない、本文目次に記名し責任を明らかにした。
7. 本書の編集は兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課、深井明比古・別府洋二が行なった。
8. 本報告書にかかる出土遺物及び写真、実測図等は、兵庫県埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区荒田町二丁目一の五）で保管している。ご活用いただきたい。

本文目次

第1章	調査に至る契機と経過	1
第1節	古墳の発見	深井 明比古 1
第2節	測量調査	深井 1
第3節	発掘調査	深井 2
第4節	整理作業	高島 知恵子 4
第2章	遺跡周辺の環境	別府 洋二 5
第3章	調査	9
第1節	立地	深井 9
第2節	墳丘	深井 10
第3節	主体部	深井 12
第4節	遺物	別府 14
第4章	まとめ	深井・別府 21

挿図目次

第1図	調査前現況図	2
第2図	整理作業	4
第3図	三田盆地周辺の主要遺跡	6
第4図	古墳の立地	9
第5図	地形測量図(調査前)	10
第6図	地形測量図(調査後)及び墳丘土層断面図	11
第7図	土器出土状況	12
第8図	主体部	13
第9図	主体部出土遺物(1)―須恵器―	14
第10図	主体部出土遺物(2)―鉄製品―	16
第11図	昭和56年採集遺物―須恵器―	17
第12図	須恵器ヘラ記号拓影	18

図 版 目 次

- 図版 1 遺跡の立地
- 図版 2 遠景
- 図版 3 古墳全景 主体部
- 図版 4 古墳全景 主体部完掘状況
- 図版 5 遺物出土状況
- 図版 6 鉄刀出土状況 調査風景
- 図版 7 出土遺物 1
- 図版 8 出土遺物 2
- 図版 9 出土遺物 3
- 図版 10 出土遺物 4

第1章 調査に至る契機と経過

第1節 古墳の発見

墓山古墳の発見は、1981年6月23日、国道176号線の神戸市と三田市境付近の横山峠にて崖崩れ、地滑り防止のための防災工事が行なわれた際に土器が発見された。この連絡が三田市教育委員会にあり、さっそく社会教育課教育文化係、高島信之氏が現地を確認した結果、山頂部に古墳らしき高まりがあり、すでに墳丘と考えられる部分の半分以上が破壊されており、崖状をなしていた。また発見当時の聞き込みによると、古墳々頂部を重機により1～2m削り取った際に土器がまとまって出土したとのことであった。

道路防災工事に発見されたものであるが、梅雨期でもあり、現状のまま工事を停止し、放置することは、危険であるため、古墳の残存部以外の工事のみ実施するというのを、兵庫県教育委員会と兵庫県北摂整備局との間において協議され、以上のように調整された。

なお古墳の残存部分については三田市教育委員会の協力を得てさっそく地形測量を行なうことになった。

第2節 測量調査

古墳が発見されてから、早急に測量調査を検討し、兵庫県教育委員会と三田市教育委員会の職員により実施されることになった。

測量は1981年7月2日に行なわれた。^{註1} 測量方法は工事関係や土地境界杭を基準にし、頂上部に平板ポイントを設定し、墳頂部から4m付近までを、100分の1スケールで行なわれた。

測量調査担当者

兵庫県教育委員会	社会教育・文化財課
技術職員	岡田 章一
“	波辺 昇
三田市教育委員会	社会教育課
調査員	高島 信之
補助員	西尾知恵子

註1. 高島信之 西尾知恵子 「国道176号線道路防災工事に伴い発見された墓山古墳について」『三田考古』第7号、三田市教育委員会 1983

第3節 発掘調査

1981年6月防災工事中に見えられて、間もなく三田市教育委員会の協力のもと、兵庫県教育委員会が測量調査を行なった。そして、古墳の現状はほぼ変更することなしに保たれていた。

その後、兵庫県北摂整備局土木部から、国道176号線の神戸市と三田市境界の横山峠付近を拡幅することが計画化され、県教育委員会に墓山古墳の発掘調査を依頼された。

兵庫県教育委員会と兵庫県北摂整備局との間で現状での保存が可能であるかどうか慎重に検討されたが、交通量に比して道路幅が狭く、現状のままでは著しく交通に影響が生じるため、峠の西側部分の掘削がやむをえないと判断された。そのため墓山古墳の発掘の必要性が生じ、1981年10月頃に兵庫県教育委員会によって発掘することが決定された。

発掘調査に先だて、県教育委員会と北摂整備局とで発掘調査が可能な範囲を双方で確認し、法的手続き関係が完了し、工事計画図、市域全図、空中写真等が準備された。

発掘調査は1985年10月1日から開始された。当初、古墳の残存状況も悪く、先年発見された



第1図 調査前現況図

遺物は主体部からのものであると考えられたため、墳丘確認のためのトレンチ調査を予定していた。

トレンチ発掘の結果、墳丘上面にて主体部と考えられる部分から出土したため、古墳全体を発掘し、主体部を完掘する必要が生じ、全面調査に移行した。

全面調査を行なううち、墳頂部では主体部の掘りかたが検出された。墳丘は表土、流土を取り除いた結果、当初、円墳と考えられていたが方墳の可能性が強いことが判明してきた。主体部からも須恵器、鉄器類が出土し、木棺の痕跡が発掘された。

以上の結果、発掘調査を完了し、報道関係に対し発表を行なった。また10月8日には北摂整備局に対して現場管理引継ぎを行ない、すべての作業を完了した。

- 10月1日 発掘調査前の写真撮影。調査地区内の伐採作業。
- 10月2日 南北方向のトレンチ発掘。墳頂部で主体部を検出。
- 10月3日 墳丘表土掘削。主体部の発掘開始。墳丘断面精査。
- 10月4日 主体部（木棺）を発掘し、須恵器出土。墳丘表土掘削。
- 10月7日 主体部発掘し、鉄製品出土。
- 10月8日 主体部を完掘し写真撮影、実測、たちわりを完了。墳丘を写真撮影、測量を行ない調査を終了した。

昭和60年度発掘調査の体制

調査主体	兵庫県教育委員会	社会教育・文化財課
(調査事務)	課長	北村 幸久
	参事	森崎 理一
	副課長	黒田賢一郎
	課長補佐	和田 富男
	埋蔵文化財調査係長	標本 誠一
	技術職員	渡辺 昇
	管理係長	小西 清
	主査	八家 均
	〃	板本 豊明
	事務職員	松本 豊彦
(調査員)	技術職員	深井明比古
	〃	別府 洋二
	補助員	高橋 学、岸田 浩治
	事務員	東前 祐子
	整理作業員	大前 厚美、西村サダ子、畑谷 敦子
	運転員	岸本 勉
	作業員	井上 昇、西尾 精一、古中 久夫、田中 実 福井 詳治、畑末千代子、畑末きみゑ、中島 清子 岸下 節子、前中ともゑ、大勢 弥生、北本あや子 小谷 幸子、塚本 敏子、戸出よし子、真造美千代

第4節 整理作業

整理作業は、昭和61年度に受託した。作業は兵庫県埋蔵文化財調査事務所で行ない、内容としては8月に入り水洗い・復元作業を始めた。9月からは遺物実測・トレース・レイアウトを行なった。なお遺物写真の撮影については、10月に森 昭氏に撮っていただいた。この間、昭和56年度に採集された須恵器に関しても合わせて作業を実施した。

整理作業の体制は次のとおりである。

整理作業 一昭和61年度一

社会教育・文化財課	課長	北村 幸久
	参事	森崎 理一
	副課長	黒田賢一郎
	管理係長	小西 清
	係員	松本 豊彦・足立 彰久
	課長補佐	福田 至宏
課長補佐兼埋蔵文化財調査係長		大村 敬通
事務担当係員		小川 良太・渡辺 昇
調査員		深井明比古・別府 洋二
整理補助員		高島知恵子・石本 淳子・井川 佳子 松本 睦・下釜 豊美・長澤 敦子 灰木恵美子



第2図 整理作業

第2章 遺跡周辺の環境

三田市は兵庫県東部に位置し、大阪湾に注ぐ武庫川河口を遡ること約20数kmの内陸にある。律令制下においては摂津国有馬郡に属しているが、摂津でも北西端にあたり、北は丹波、西は播磨に接している。

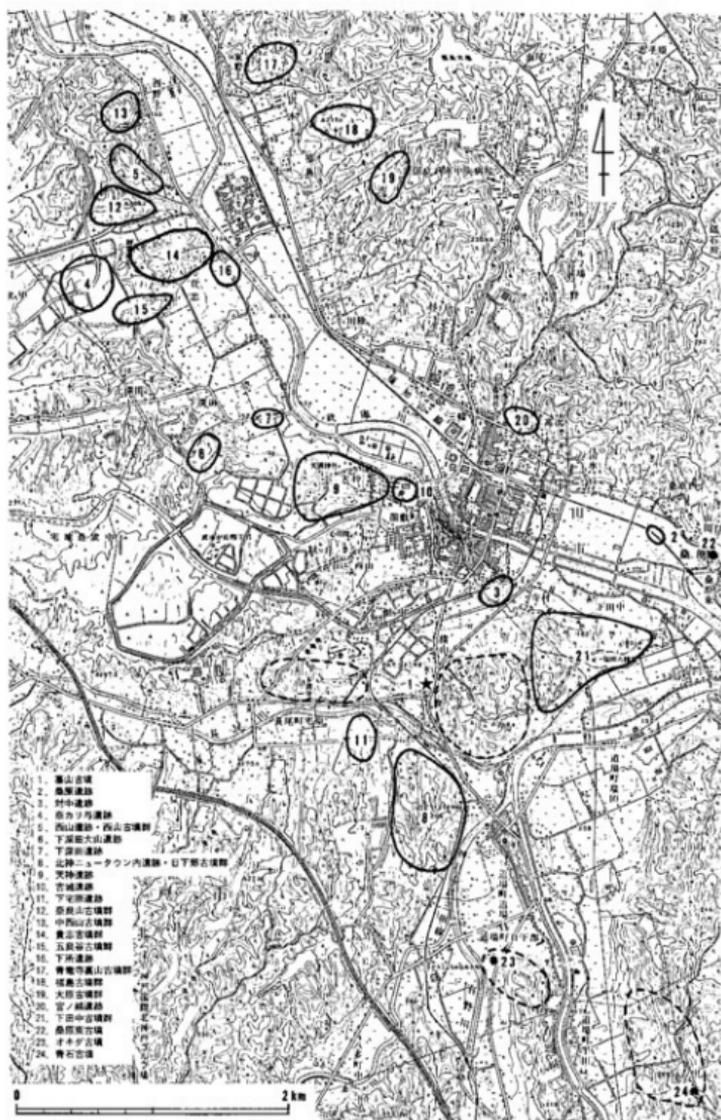
北西から南東へ貫流する武庫川中流域にあたり、その両岸に形成される段丘面や、有馬川等の支流を含めて三田盆地が形成されている。その周囲、特に武庫川右岸では主として神戸層群によって構成される丘陵がひろがっており、墓山古墳もその一角に位置する。

縄文時代の遺跡は三田盆地各所で確認されているが、そのほとんどが後期以降のものである。中期以前に遡るものは盆地北側で青野ダム建設に伴う調査で出土した押型土器などに限られる。また近年の調査では桑原遺跡^{註2}などの盆地内低地でも中期末の土器等が見つかっている。

内陸の三田盆地に弥生文化が波及するのは今のところ前期新段階の時期であろうと思われる。武庫川右岸の段丘末端に立地する対中遺跡^{註3}では、弥生時代前期新段階に属すると考えられる井堰を伴った水路が確認され、同時期の土器や石廬丁の他に縄文晩期の土器も出土している。しかしながらこの時期の遺跡は継続せず、短期間で終わるようである。

弥生時代中期に入ると遺跡数は爆発的に増加するが、その大きな特徴として集落が丘陵上へのぼることが挙げられる。主な遺跡は武庫川右岸に限られるが、今後左岸域でも発見される可能性は大きい。奈カリ与遺跡^{註4}は標高約220m、比高約65m以上の斜面地に営まれた集落で、中期後半の時期に限定される。西山遺跡^{註5}は標高195m、比高45mに立地し、中期後半の方形周溝墓を検出している。下深田大山遺跡^{註6}は標高約200m、比高約40mの尾根頂部に立地する中期後半の集落址である。更にその麓にある下深田遺跡^{註7}でも同時期の溝が検出され、立地の異なる2遺跡の関係が問われている。盆地南辺では有野川と長尾川に挟まれた標高約190m、比高約30mの丘陵上に弥生時代中期末から後期にかけての住居址や箱式石棺が検出され、鉄器やガラス玉なども見つかっている。盆地のほぼ中央に位置する天神台地上には天神遺跡^{註8}や古城遺跡^{註9}などがある。天神遺跡は標高約160m、比高約10mに立地し、弥生時代中期初頭から後期にわたる遺物が出土している。この遺跡は他の遺跡と異なる歴代遺跡として、三田盆地内におけるひとつの中核的集落と捉えることができる。後期に入ると主として低地に集落が出現する。対中遺跡^{註10}や長尾川に沿った狭小な低地にある下宅原遺跡^{註10}、武庫川左岸の桑原遺跡は、その後古墳時代にまで続く集落址である。中でも下宅原遺跡は知り得る限りでは墓山古墳に最も近い同時期の集落である。

三田盆地では奈良山1・2号墳^{註11}以外には古墳時代前期・中期の古墳は確認されていない。後期に入ると盆地各所に古墳群が出現する。盆地北部の武庫川右岸丘陵上には、中西山古墳群^{註12}・西山古墳群^{註13}・奈良山古墳群^{註13}・貴志古墳群^{註14}・五良谷古墳群^{註14}が近接して存在する。中西山古墳群で



第3図 三田盆地周辺の主要遺跡

は横穴式石室1、木棺直葬3の4基が確認されており、横穴式石室からは馬具や特殊扁壺と呼ばれる類例の少ない異形須恵器が出土している。西山古墳群は8基で構成されており、中には木棺直葬の主体部6基をもつ前方後円墳が1基が含まれる。後円部にある埋葬施設6からは金銅冠が出土している。また「横穴式土壇」と呼ばれる終末期の特異な埋葬施設も確認されている。奈良山古墳群は先述の4世紀代に遡る可能性のある1・2号墳を含め13基で構成される。終末期に属する「横口式石棺」1基を除いては木棺直葬を主な主体部とする。7号墳からは馬具や鈴付台付冠が出土している。五良谷古墳群は11基確認されており方墳も含まれている。

これらの古墳群と武庫川を挟んで対峙する丘陵上には、加茂古墳群・青竜寺裏山古墳群^{註15}・福島古墳群・大原古墳群が近接して存在する。先の武庫川右岸の古墳群が木棺直葬を多く採用し続け、横穴式石室をほとんど含まないのに対して、この武庫川左岸の古墳群には横穴式石室墳が多く見られる。その中には石腰を有する竹内古墳などの特異なものも含まれる。

盆地南部に目を転ずると、墓山古墳が立地する武庫川と有馬川・長尾川に挟まれた丘陵上にも古墳が点在している。その詳細は不明であるが、丘陵東半では南側斜面に横穴式石室墳が築かれており、また稜線上にもおそらく木棺直葬と思われるものが点在している。墓山古墳は、古代からの交通路として利用されていたと思われる横山峠に所在するが、これより西側では横穴式石室墳は確認されていない。墓山古墳と長尾川を挟んだ南側の丘陵上には日下部古墳群がある。北神第15地点古墳は5世紀末から6世紀初頭にかけて造られた河原石積みの竪穴式石室をもつものである。また、北神第3地点古墳は横穴式石室をもつ前方後円墳である。更に有馬川を南に遡った丘陵上にも横穴式石室をもつオキダ2号墳^{註16}と青石古墳^{註17}が存在し、武庫川流域に生産基盤を置く集団が古代からの交通の要所を見落ろす位置を占めている。

三田盆地の後期古墳の分布は盆地の南と北に大きく2分される。墓山古墳の立地する南辺の古墳は武庫川本流域にその生産基盤をもつと言うよりは、有馬川・有野川・長尾川の武庫川支流域に属するものであろう。

註

- 1 榎本誠一、山本三郎、吉田昇、大平茂、岡田章一、深井明比古「三田市・青野ダム建設に伴う埋蔵文化財調査概報」兵庫県教育委員会 昭和53年
榎本誠一、井守徳男、吉田昇、森内秀造、水口富夫、渡辺昇、丹治康明、佐藤良二「三田市・青野ダム建設に伴う埋蔵文化財調査概報②」兵庫県教育委員会 昭和54年
- 2 昭和59年兵庫県教育委員会が調査、昭和62年3月調査報告書発行予定
- 3 昭和59年～61年兵庫県教育委員会が調査
- 4 井守徳男、山本三郎、渡辺昇、大平茂、榎本誠一、吉識啓仁、水口富夫、岡田章一、青木哲哉、佐藤良二、西尾知恵子「北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅱ」兵庫県教育委員会 昭和58年
- 5 高島信之・瀬崎誠「北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅰ」兵庫県三田市教育委員会 昭和58年
- 6 高島信之・河本健介「下深田遺跡」『兵庫県埋蔵文化財調査年報・昭和56年度』兵庫県教育委員会

昭和59年

- 7 『北神第4地点遺跡現地説明会資料』神戸市教育委員会 昭和59年
- 8 渡辺昇「三田市天神遺跡採集の弥生土器」『兵庫考古』第8号 兵庫考古研究会 昭和54年
- 9 高島信之・西尾知恵子「三田市古城浄水場建設に伴い発見された古城遺跡について」『三田考古』第4号 三田市教育委員会 昭和57年
- 高島信之「古城遺跡」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和56年度』兵庫県教育委員会 昭和59年
- 10 「下宅原遺跡発掘調査現地説明会資料」神戸市教育委員会 昭和59年
- 『地下に眠る神戸の歴史展Ⅱ』神戸市教育委員会 昭和59年
- 11 前掲5
- 12 井守徳男「中山遺跡」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和56年』兵庫県教育委員会 昭和59年
- 13 前掲5
- 14 前掲4
- 15 榎本誠一・松下勝『日本の古代遺跡3 兵庫南部』保育社 昭和59年
- 16 「地下に眠る神戸の歴史展Ⅱ」神戸市教育委員会 昭和59年
- 『昭和57年度 神戸市文化財年報』神戸市教育委員会 昭和59年
- 17 藤岡弘『青石古墳発掘調査報告書』西宮市教育委員会 昭和49年

三田盆地周辺の遺跡概要については、前掲註4・5・15や井守徳男「畿内周縁部における古墳の展開と終末」『北山茂夫追悼日本史学論集 歴史における政治と民衆』日本史論叢書 昭和61年を参考にした。

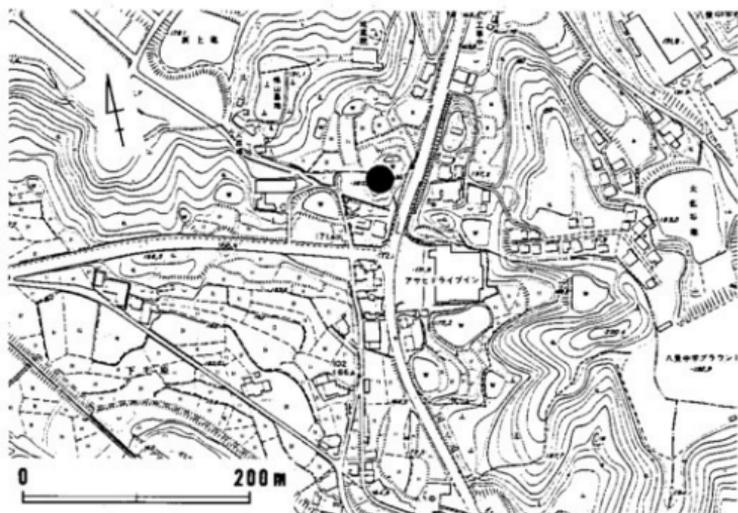
第3章 調査

第1節 立地

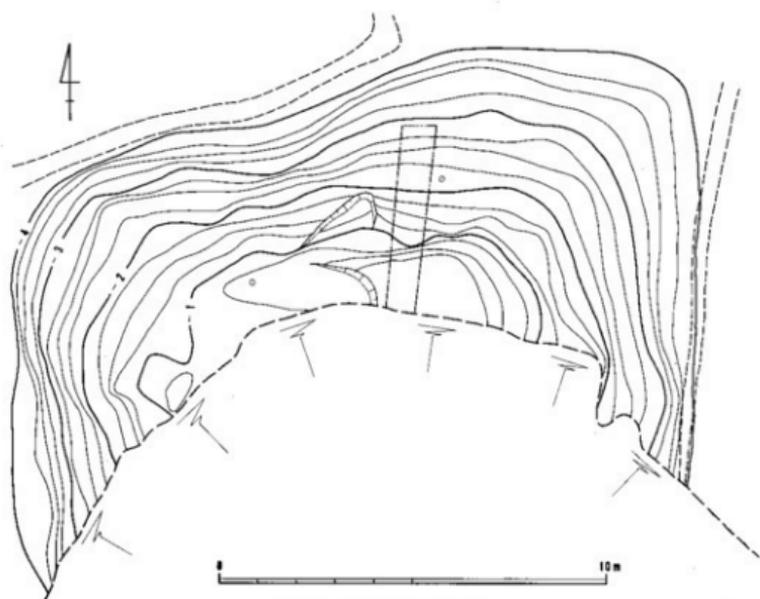
墓山古墳は三田盆地と長尾川などの武庫川支流域に広がる長尾、道場付近の平野部とを分ける、通称横山峠にある。地番は三田市横山町1545にあたり、南北方向の平地が一望できる丘陵頂上部にあり、現在はこの峠は交通の要所である。

古墳の位置する丘陵は武庫川の南側一帯に大きく広がるものである。古墳から北は低い山塊が三田盆地に向かい、低くなだらかに続いている。東は横山峠を隔てて、下田中の丘陵が広がり、古墳が造営しやすい立地条件にある。また墓山古墳のすぐ東の山塊に古墳状の隆起が存在するが、古墳としての確証は得られなかった。南は長尾川が西から東に流れ、有馬川、有野川が合流し、武庫川に注いでいる。さらに南に広がる北神の山々は、全体に低丘陵で構成され、部分的には深い谷地形が発達している。

古墳の立地する丘陵は横山峠西方の丘陵一帯の一画を構成するが、その中でも独立丘陵を呈する。古墳はこの丘陵頂上の標高190m付近にあり、峠までの比高は約40mをはかる。



第4図 古墳の立地



第5図 地形測量図（調査前）

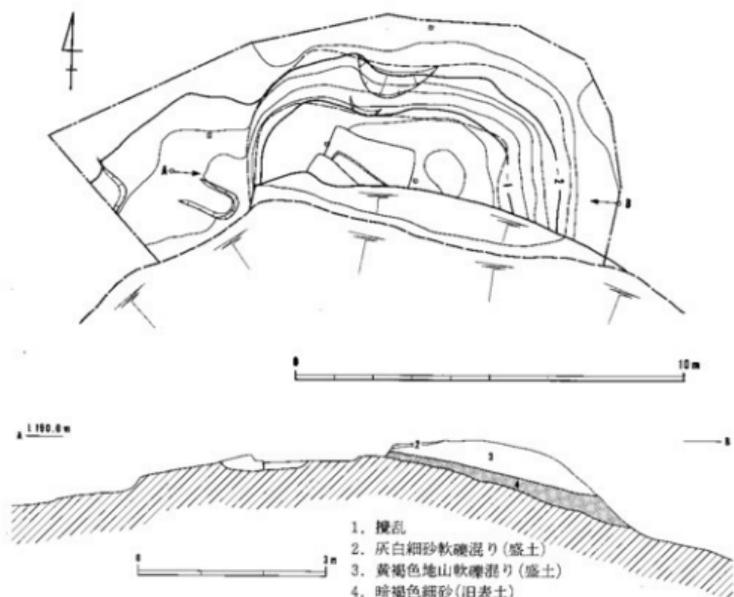
第2節 墳 丘

古墳は横山峠西側の丘陵上に位置し、墳頂部で標高約190mをはかる。古墳発見時に測量調査が行なわれ、径約13m、高さ2.5mの円墳であると考えられていた。測量調査時の等高線からは、186m付近でなだらかな地形になるが、急峻でありにも高低差があるため中腹にある僅かな傾斜変換点が墳丘裾部と考えられた。

発掘調査で墳丘全体を覆う腐食土と墳丘流土を除去した。その結果、墳丘の西側の延びは少なく、僅か30cm程度の段状の地山整形がみられたにすぎず、一般によく見られる掘状の凹み或は溝状の落込みはなかった。また墳丘外西側では平面U字形を呈した土壇状の凹み（1.5m×1.0m）が2箇所、地山を掘込んで存在したが、出土遺物はなく、特別な土層関係もなかったことから、性格は不明である。

墳丘北側では比高差が1.5mあり、墳丘裾部の中央付近に幅2mの半円形を呈した掘込みがある。北側墳丘裾部はほぼ直線に見え、東側では比高差1.5mあり、ゆるやかな傾斜をもち、墳丘裾と考えられる所で緩傾斜にうつる。

以上、墳丘の一部分に掘削があったり、墳丘は全体の半分以上しか存在しないことがあるが、



第6図 地形測量図(調査後)及び墳丘土層断面図

北、東、西の墳丘はいずれも直線的であり、北東、北西のコーナーが明瞭であることから、東西約8m、南北5m以上の方墳である可能性が大きい。

しかし、古墳が小規模なことから、僅かな削平、掘削等によって容易に変形することも考えておかなければならない。

墳丘は1層攪乱、2層灰白色細砂軟礫混り(盛土)、3層黄褐色地山軟礫混り(盛土)、4層暗褐色細砂(旧表土)、5層淡茶褐色軟岩層(地山)で構成されている。全体的に盛土は北と東にみられるのみで、西側では地山をカットした状態しか検出できなかった。また墳丘の流出が激しかったことは、墳頂部で腐食土を除去した時点で主体部が削平された状態で検出されたことや、墳丘が残存する北、東、西側に流土として墳丘盛土が厚く堆積していたことから判断できる。

以上、調査前の予想とは若干違った結果になったものの、一辺8m程度の小型の方墳であることが想像される。また墳丘の外部施設としての列石、周溝などは検出されず、古墳西側の僅かな平坦地が、隣接する古墳である可能性を考えて調査を行なったが、土壌状の凹みが検出されたにとどまった。

第3節 主体部

主体部は古墳全体を覆う腐食土を除去した際、標高189.70mにて1箇所検出された。主体は古墳全体からみると、やや西寄りであるが、墳丘上面部では、ほぼ中央付近に位置していた。また墳丘上面の西寄りに、深さ約30cmの攪乱層があり、主体部の南西隅付近が一部乱されていた。

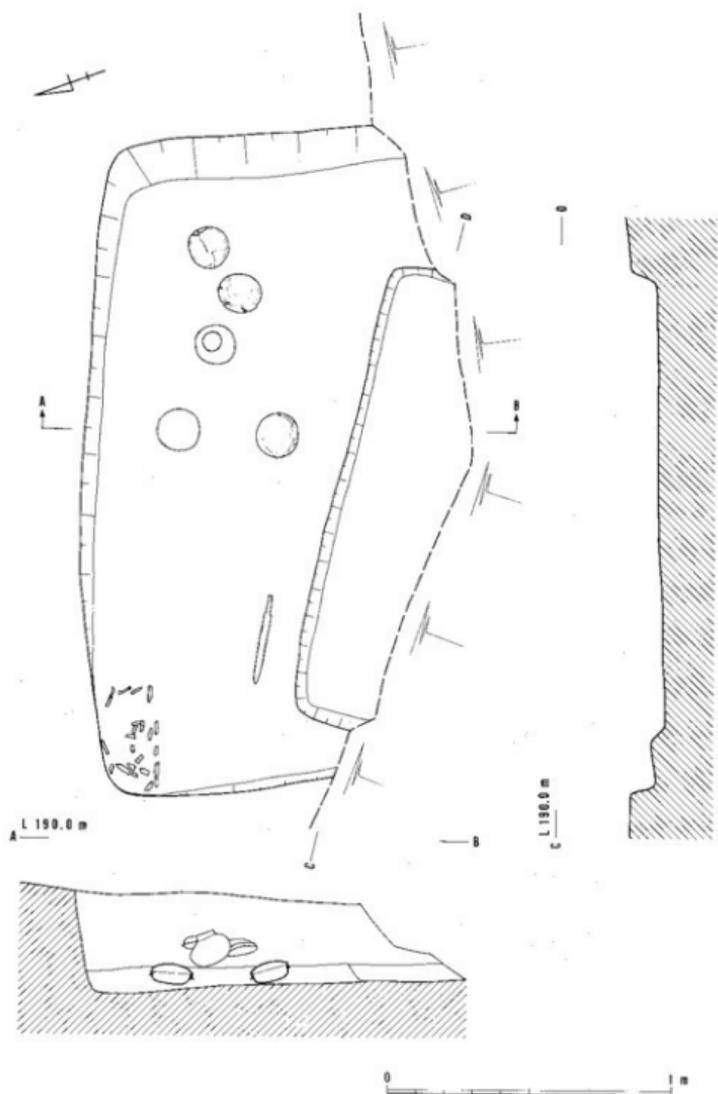
主体部の種類は北西-南東方向に主軸をもつ木棺であった。木棺の墓壇は東西2.3m、南北1.4m以上、深さ35cmをはかるものである。木棺は長さ155cm、幅44cmの規模で、深さは6cmしか残っていなかった。また木棺底面、側面の両端には掘込み等がないことから箱形木棺であったことが予想される。墓壇の方向に対して木棺はN55°Wが主軸で、墓壇の方位と若干異なる。また通常みられる木棺に比べて墓壇幅が広いように感じられる。

この主体部からの遺物として、木棺の北東側に須恵器杯蓋、杯身が4セットと短頸壺1点が出土した。木棺北西では主軸に沿った状態で鉄製の小刀が切先を西に向けた状態で出土した。また掘りかた北西隅にて鉄鍬が9本以上集中して出土したが、ほとんど細かく折れた状態であった。結局この主体部の遺物は木棺内には無く、墓壇内からのものばかりであった。

古墳発見のきっかけとなった遺物は、墳丘内の出土と言われていることから、今回発掘した主体部の他に主体部が存在した可能性が考えられる。



第7図 土器出土状況



第8圖 主体部

第4節 遺物

今回の調査で主体部から出土した遺物は次の通りである。

須恵器	杯 蓋	4
	杯 身	4
	短頸壺	1
鉄製品	鉄 鍬	9以上
	鉄 刀	1

昭和56年の遺跡発見の際に採集された遺物は次の通りである。

須恵器	杯 蓋	2
	杯 身	4
	短頸壺	1
	壺	2
	提 瓶	1

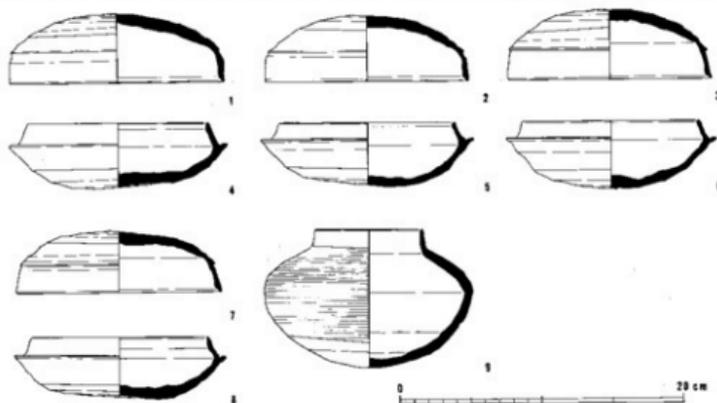
この他に図化できなかつたが、壺と思われる小片を主体部及び墳丘上から検出、昭和56年にも壺か甕の破片を採集している。

更に古墳に伴うものではないが寛永通宝、機銃薬莖を周辺で採集している。

〔主体部出土の遺物〕

須恵器（第9図）

主体部の北東部で一括して出土しており、杯は1と4、2と5、3と6、7と8が合わさっ



第9図 主体部出土遺物(1) 一須恵器一

た状態を保っていた。杯は大型で、たちあがり端面が内傾し浅く凹むものもあるが、ほとんどが丸くおさめる。蓋は天井部と口縁部をわける稜がほとんど突出しなくなる。これらは古い要素をもつものもあるが、TK10型式併行期のものと考えられる。

鉄製品（第10図）

古墳に伴う鉄製品には、鉄鏃と鉄刀があり、共に主体部に納めた副葬品である。

鉄鏃は、主体部の北西隅に集中して出土した。墳丘上に生えた松の根に押されていたため、旧状を保った状態では出土していない。変形したり、20数片に折損しており、全容を残すものはない。正確な個体数も知り得ないが、刃部の数で見ると9本は存在していたと思われる。茎には木質が残っており、矢柄（筈）を装着した状態で埋納されている。また、17で見られるように、少なくとも7本は束ねられ、布で包まれていたらしい。布帛痕が残っているものは17の他に、1～4、6・7・9などでも見られ、刃先まで布で包まれている。

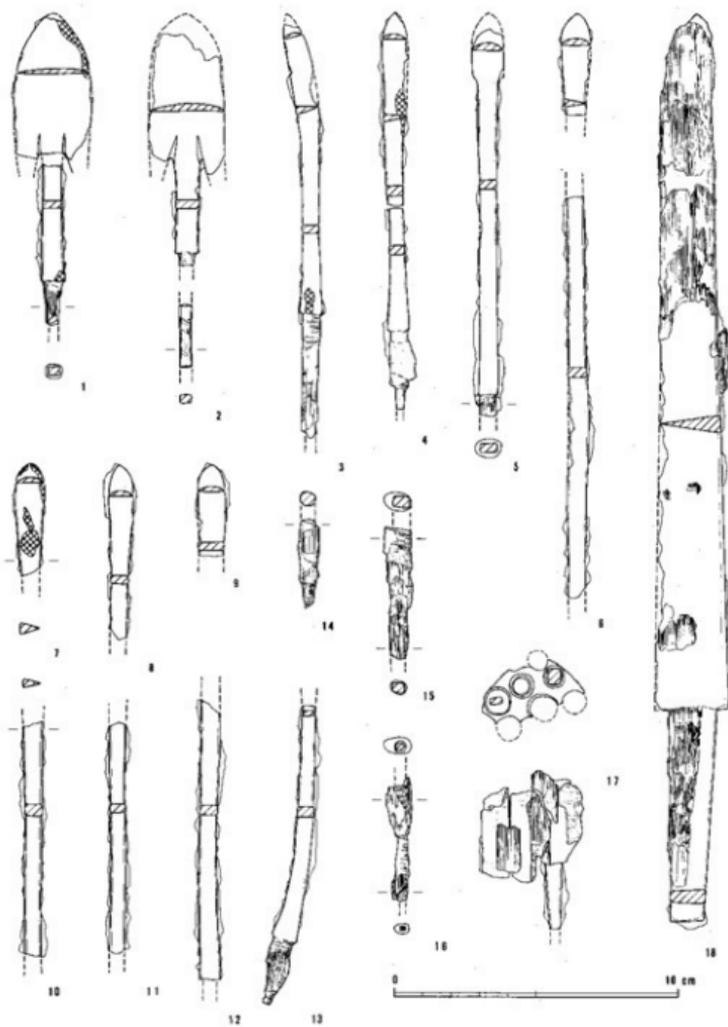
1・2は比較的全長が短く、大きな刃部をもつもので、鏃身部最大幅は1で2.7 cmある。鏃身部下端には逆刺がつき、刃部断面は扁平で、やや片丸につくられる。筈被は直線的で関をつくって茎に続く。3～13は幅の狭い鏃身部と長く伸びた筈被部をもつもので、3の現存長約14.5 cm、鏃身部最大幅約0.9 cmをはかる。鏃身部の形状は柳葉形であるが、5のように関状のものをもつものもある。鏃身部先端は両刃で、断面形は片丸を呈しているが、鏃身部下端では3・4・6・7のように片刃になるものが見受けられる。筈被部下端は、3～5・12・13で見られるように、やや幅をひろげた後に茎に続く。棘状突起は見られない。

鉄刀は、主体部の主軸と並行に切っ先を西に、刃を北側にして置かれていた。全長32.5 cm、刃部長24.5 cm、刃部最大幅2.5 cm、茎幅1.5 cmの短刀とも呼べるものである。刃部は、切っ先に近づく程幅を狭める。切っ先の形状は木質残存のため不明であるが、やや丸味をもっている。関は背関・刃関ともある両関式である。茎は頭に近づくにつれて幅・厚さとも狭める。目釘は確認できなかった。刃部・茎部とも木質が残っており、柄を装着し、鞘に収めて埋置している。

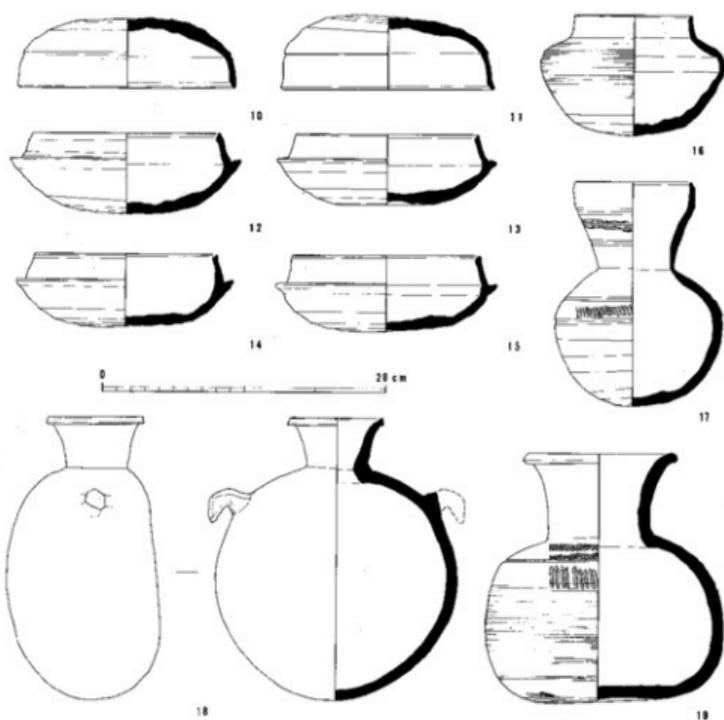
〔昭和56年採集遺物 須恵器〕（第11図）

工事中に出土したものだが、ほとんどが完形品である。杯は大型で端面を内傾させ、浅い凹線を巡らす。蓋には天井部と口縁部をわける稜線を失って浅くひろい凹線をもつものがある。主体部出土のものよりやや古い傾向をもつものが多く、MT15型式併行期のものが主となる。赤色顔料 墓山古墳出土の須恵器器表面に赤色顔料が見られるものがある。16は内面の肩部近くまで付着しており、顔料を入れた容器として使用されたのだろう。但し、底部外面にも痕跡が認められる。

その他に赤色顔料が認められるものは、蓋3・7・11、杯5・13～15であり、全て外面に見



第10图 主体部出土遺物(2) —鉄製品—



第11図 昭和56年採集遺物 —須恵器—

られる。11は天井部中央に「×」印が見られる。線の長さは共に8.5 cm、幅は1.5 cm程度である。13でも底部中央に6.5 cm×6.5 cm、幅1 cmの「×」印が見られる。15では底部の中心からややはずれた位置に6.5 cm×6.5 cm、幅1 cmの「×」印が見られる。その他のものは痕跡しか留めていないか、形の不明瞭なものである。

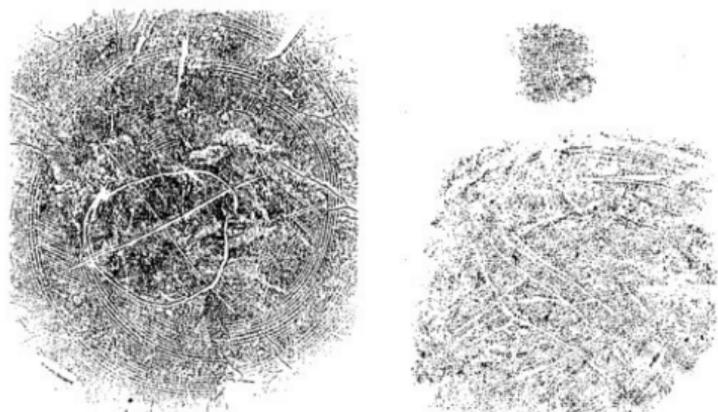
墓山古墳出土の杯の半数に赤色顔料で印が付けられている。蓋身セット両方に付くものは確認されていないが、セットのうちいずれか一方には印されていた可能性が高い。

古墳副葬品としての須恵器杯に赤色顔料で「×」印をつけた例には、同じ三田市の前ノ谷古墳^{註1}、但馬では養父郡八鹿町東家ノ上3号墳、美方郡村岡町文堂古墳、同知見1号墳などがある^{註2}。また島根県隠岐島後の五箇村の東笠根1号古墳からも出土している^{註3}。これらの須恵器はいずれも6世紀末以降のものであり、墓山古墳出土例が最も古いものとなる。

杯に赤色顔料で「×」印を描くことは、呪術的な力をもつと考えられた「赤」い紐でその土器を緊縛し封じることにあつたと考える。それでは土器の中に何を封じたのであろうか。被葬された者の魂が悪霊となって彷徨うことを封じたのであろうか。他遺跡で見られるような貝を入れて副葬された杯などと合わせて副葬品としての須恵器の意味を考えてゆかねばならない。ヘラ記号 壺19の底部外面に「⊗」印のヘラ描きが見られる。底部はカキ目によって調整された後、中央部のみ単一方向のナデを施し、中心からややはずれた位置にまず「×」印を刻み、その後、重なる「○」印を刻む。「×」印の長さは約8.5cmである。提瓶18の背面には非常に細い線で格子状のヘラ描きが見られる。また同一面の頸部にも3条のヘラ描きがある。短頸壺9の底部からやや離れた位置にも数条のヘラ描きが認められる。

ヘラ記号の意味については、窯を標識するものであるとか、数量単位を表わすものなど種々の意見があるが、壺19の「⊗」印が、杯に見られる赤色顔料による「×」印と同一視できるなら、「使用者＝註文者の側の必要にもとづいたもの」とする説を補強することができよう。

- 註1 山本三郎「前ノ谷古墳」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和57年度』兵庫県教育委員会 昭和60年
 2 谷本進「漆記号を施した須恵器について」『但馬考古学 第2集』但馬考古学研究会 昭和60年
 3 勝部昭「十印のある土器」『古代学研究 第94号』昭和55年



第12図 須恵器ヘラ記号拓影

付表 出土土器観察表

器種	番号	法量	形 態	技 法	備 考
蓋	1	14.9 4.9 —	☆天井部と口縁部をわける稜線ははぶく突出しない。 ☆端面は内傾して浅く凹む。	☆ヘラ削りは天井部のほぼ全体に施され、方向は逆時計まわり。 ☆天井部内面には一方向の仕上げナデ。	外面全体に灰かぶり
蓋	2	14.1 4.7 —	☆口縁部はやや外方にひらく。 ☆天井部と口縁部をわける稜線ははぶく突出するにとどまる。 ☆端面は内傾して浅く凹む。	☆ヘラ削りは天井部の $\frac{1}{2}$ 強まで見られる。逆時計まわり。 ☆天井部内面の仕上げナデは一方向であるが面積は狭い。 ☆内面に粘土紐の凹凸が残る。	
蓋	3	14.2 4.9 —	☆口縁部はやや外方にひらく。 ☆天井部と口縁部をわける稜線ははぶく突出する。 ☆端面は浅く凹み段を有する。	☆ヘラ削りは天井部のほぼ全体に施される。逆時計まわり。 ☆天井部内面の仕上げナデは一方向。 ☆内面に粘土紐の凹凸が残る。	天井部外面に朱が認められる。
杯	4	12.6 4.65 —	☆たちあがりは内傾し、端面は内側に傾斜し、浅く凹む。	☆底部のヘラ削りの範囲は $\frac{1}{2}$ 強。逆時計まわり。 ☆底部内面は一方向の仕上げナデ。	
杯	5	12.2 4.6 —	☆たちあがりの内傾度は大きい。 ☆口縁端部は丸くおさめる。	☆底部のヘラ削りの範囲は $\frac{1}{2}$ 強。逆時計まわり。 ☆底部内面は一方向の仕上げナデを施すが、指頭圧痕を残す。	底部外面に朱が認められる。
杯	6	12.3 4.9 —	☆たちあがりの内傾度は大きい。 ☆口縁端部は丸くおさめる。	☆底部のヘラ削りの範囲は $\frac{1}{2}$ 強。逆時計まわり。 ☆底部内面に一方向の仕上げナデ。	
蓋	7	14.2 4.4 —	☆口縁部はやや外方にひらく。 ☆天井部と口縁部をわける稜線ははぶく突出する。 ☆端面は内傾して浅く凹む。	☆ヘラ削りは天井部の $\frac{1}{2}$ 強まで見られる。逆時計まわり。	天井部外面中央に朱が認められる。
杯	8	12.3 4.4 —	☆たちあがりは内側を屈曲させ内傾度は大きい。 ☆口縁端部は丸くおさめる。 ☆底部はやや扁平である。	☆底部のヘラ削りの範囲は $\frac{1}{2}$ 強。逆時計まわり。 ☆底部内面に一方向の仕上げナデ。	
短頸壺	9	7.5 9.75 4.9	☆わずかに内傾して直線的にたつ短い口縁をもつ。 ☆口縁端は丸くおさめる。	☆底部は不定方向のヘラ削り。 ☆胴部はカキ目調整。	底部にヘラ描きが見られる。

※ 法量の数字は上段からそれぞれ口径、器高、腹径で、復元値は()で、計測不能は一で示す。

器種	番号	法量	形 態	技 法	備 考
蓋	10	15.1 5.0 —	☆天井部と口縁部をわける稜線はなくなり、浅くひろい凹線を施す。 ☆口縁端部は内傾し、浅い凹線をもつ。	☆天井部のヘラ削りは約1/3の範囲に見られる。逆時計まわり。 ☆天井部内面の仕上げナデは見られず、粘土紐の凸凹が残る。	
蓋	11	(14.8) 5.3 —	☆天井部と口縁部をわける稜線はにぶく突出しない。 ☆口縁端部は内傾し、浅い凹線をもつ。	☆天井部のヘラ削りは1/2以上施される。逆時計まわり。 ☆天井部内面の仕上げナデは見られない。	天井部外面に朱による「X」印が見られる。
杯	12	13.0 5.7 —	☆たちあがりはわずかに内傾する。 ☆口縁端部は内傾し浅い凹線をもつ。	☆底部のヘラ削りの範囲は約1/3。逆時計まわり。 ☆底部内面に一方向の仕上げナデ。	底部外面に朱が認められる。
杯	13	12.7 5.0 —	☆たちあがりはわずかに内傾する。 ☆口縁端部は内傾し、とがらせ気味におさめる。	☆底部のヘラ削りの範囲は約1/3。逆時計まわり。 ☆底部内面に一方向の仕上げナデ。	底部外面に朱による「X」印が認められる。
杯	14	12.7 5.2 —	☆口縁端部に浅い凹線をもつ。	☆底部のヘラ削りの範囲は1/2強。逆時計まわり。	底部外面に朱が認められる。
杯	15	(13.0) 5.4	☆口縁端部に浅い凹線をもつ。	☆底部のヘラ削りの範囲は1/2強。逆時計まわり。 ☆底部内面に不定方向の仕上げナデ。	底部外面に朱による「X」印が認められる。
短頸壺	16	8.15 8.5 13.0	☆短く直立する口頸部をもつ。 ☆口縁端部はやや内傾し、とがらせ気味におさめる。	☆底部は回転ヘラ削りを施す。 ☆胴部はカキ目調整を施す。 ☆底部内面は一方向の仕上げナデ。	内面に朱が付着している。 底部外面にも朱の痕跡がある。
壺	17	8.0 16.0 11.85	☆外反する頸部にやや内湾する口縁部がつく。 ☆口縁端はとがらせ気味になる。 ☆頸部と胴部に2条の広い凹線をもち、各々その間に横書き波状文・列点文を施す。	☆底部及び胴部下半は回転ヘラ削り。	灰かぶり
提瓶	18	6.55 20.1 —	☆短く外反する頸部から段をもち側面をつくる口縁部に続く。 ☆体部は前面が丸くふくれ、背面はほぼ平らである。 ☆肩の両側にカキ状に屈曲する耳がつく。		体部背面及び同面頸部にヘラ描きあり。 灰かぶり
壺	19	10.0 17.7 15.65	☆口縁部は外反して丸くおさめる。 ☆胴部に2条の広い凹線、その間と上部に計3条の横書き列点文を施す。 ☆底部は扁平である。	☆体部下半はタテ方向のハケ目の後、粗いカキ目調整を施す。 ☆調整は粗雑。	底部外面に「◎」のヘラ描きがある。

第4章 まとめ

今回の墓山古墳発掘調査によって次のようなことが明らかになった。

1. 墓山古墳は工事によって墳丘の多くは失なわれ、主体部の存在は否定的であった。しかし今回の発掘により、墳頂部の僅かな平坦地に主体部が検出されたことや、当初円墳と考えられていたが、方墳である可能性が高くなったことなど、今後の調査を考えるうえでの留意点がいくつかあげられる。
2. 墓山古墳の位置する三田盆地南の神戸市境との丘陵上には古墳は群集せず、小尾根突端付近などに位置する独立墳が知られており、墓山古墳も丘陵頂上に築かれた独立墳であろう。
また周辺の方墳については類例は少なく、明らかなものとして、三田市下田中古墳群中に一辺約10m、高さ1.2mのものが1基存在する程度である。
3. 三田盆地周辺の後期古墳は、横穴式石室墳と木棺直葬墳がやや偏った分布を示しながらも混在している。その中で例えば、墓山古墳とは長尾川を挟んだ南側の丘陵上では、壜穴式石室墳→木棺直葬墳→横穴式石室墳という推移がとらえられている。
墓山古墳は木棺直葬をもつ独立墳であるということを踏まえて、その立地する丘陵上の資料増加を待ってその位置付けを行なう必要がある。
4. 出土遺物から見て、墓山古墳は6世紀の前半代に造墓された古墳である。今回の調査で主体部から出土した遺物と比較して、昭和56年に採集された遺物の中には若干古い様相をもつものが含まれている。このことから、複数の主体部が存在した可能性は高い。



図版二 遠景（東から）





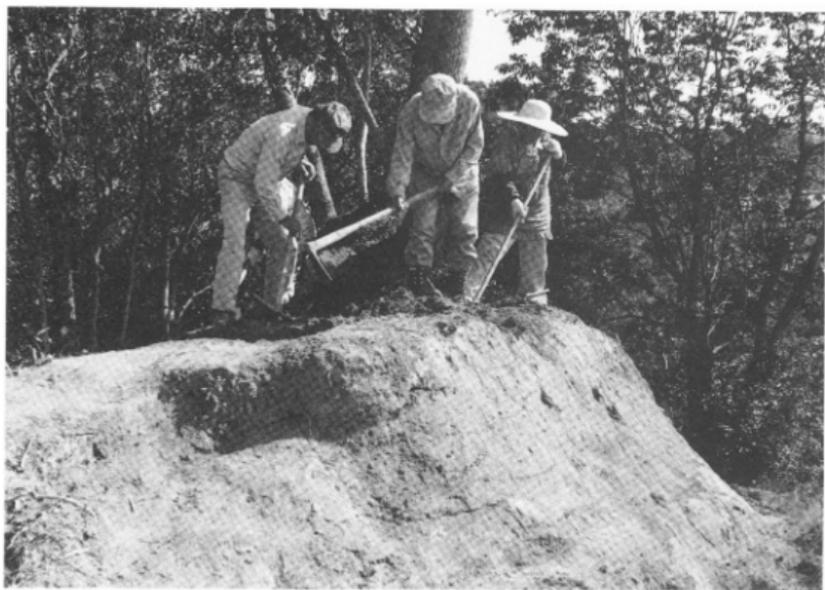
図版四 古墳全景 主体部完観状況



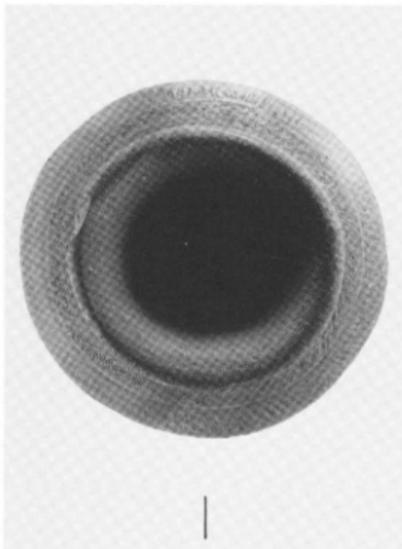
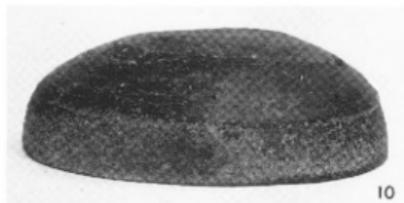
圖版五
遺物出土狀況



図版六 鉄刀出土状況 調査風景

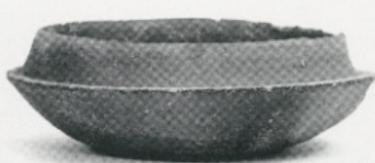
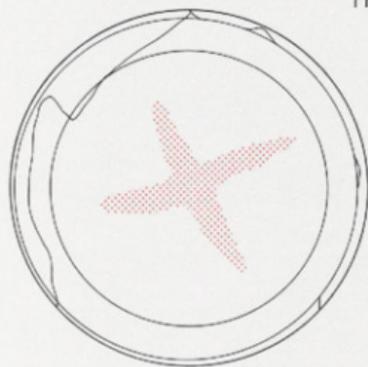




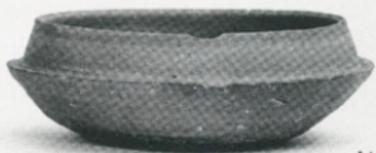
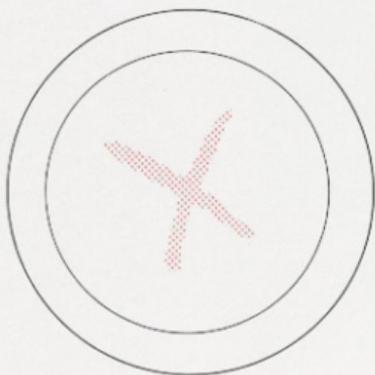




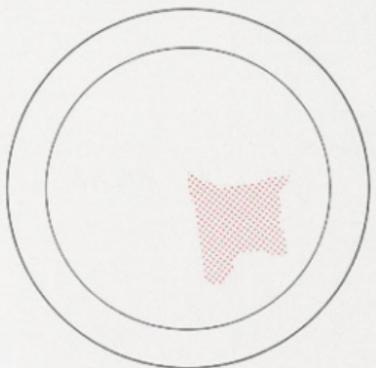
11



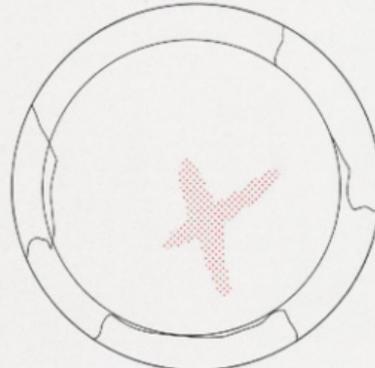
13



14



15





兵庫県文化財調査報告書 第44冊

1987年 3月 31日 発行

墓 山 古 墳

—国道176号線拡幅工事に伴う発掘調査—

編集 兵庫県教育委員会社会教育・文化財課

発行 兵 庫 県 教 育 委 員 会

〒650 神戸市中央区下山手通5丁目10-1

TEL 078 (34) 7711

印刷 船 場 印 刷 株 式 会 社

〒670 姫路市定元町4の2

TEL 0792 (96) 3535
